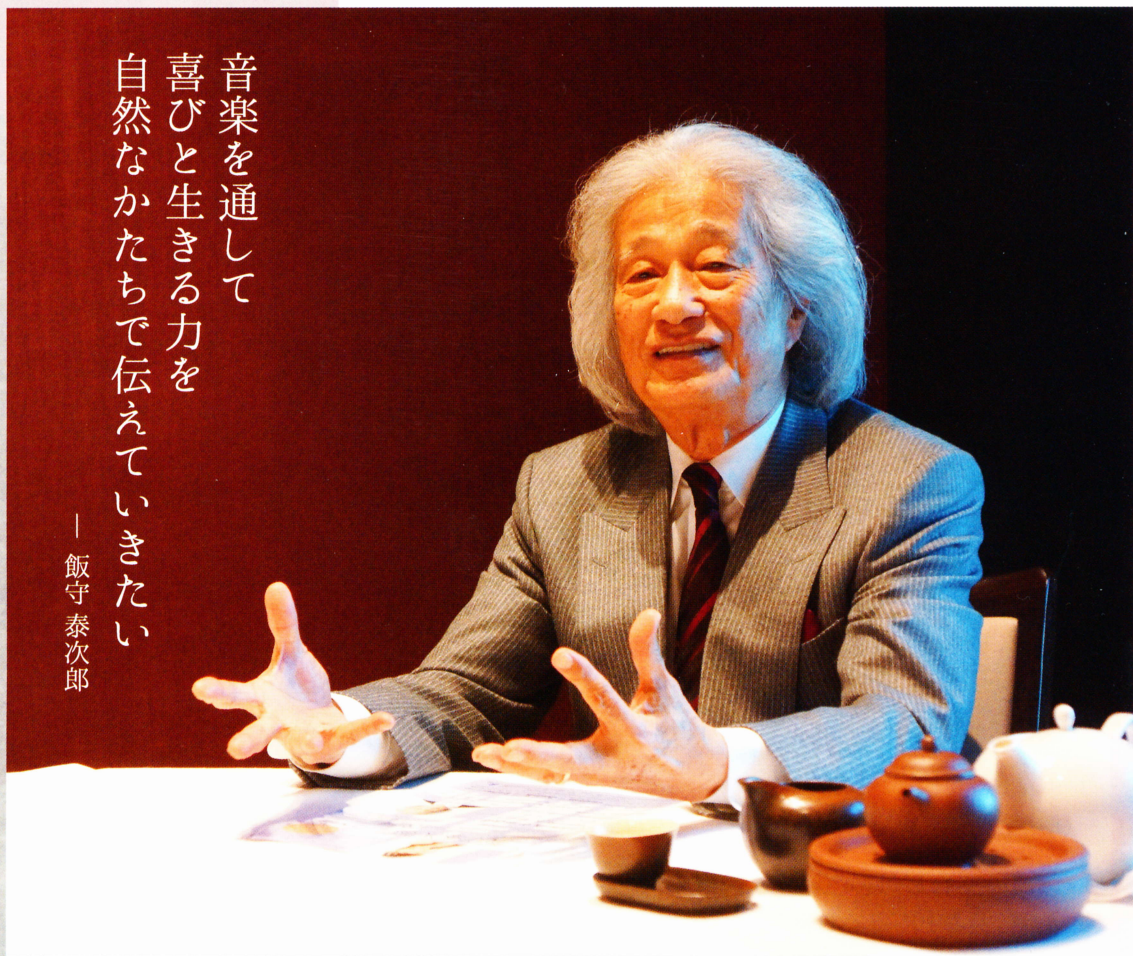


生活に音楽を、暮らしに芸術を。江東区を拠点に活動する「東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団（以下、シティ・フィル）」に。年に4回ほど、「ティアラこうとう」で定期演奏会を開催していることをご存知ですか。今回3月4日の公演に向けてシティ・フィルの桂冠名誉指揮者である飯守泰次郎さんにお話を伺いました。



音楽を通して 喜びと生きる力を 自然なかたちで伝えていきたい

— 飯守泰次郎

— シティ・フィルはどんなオーケストラだと思えますか

1997年から常任指揮者として就任し、もう20年。シティ・フィルは当時「とても若い楽団」だな、と思いました。自由に、気兼ねせずに指揮者と楽団が意見を言い合える。時にはぶつかることもありますが、いい音楽を作っていく上でそれはとても必要なこと。20年かけて一緒に作り上げてきて、私としてもとても刺激になりましたね。クラシック音楽

の中心であるドイツの音楽を、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームスなど歴史の流れに沿って掘り下げてきて、かけがえない貴重な経験を共有できました。2000年には「ミレニアムに際して世の中のためにプロケラムを」と考えて、「オーケストラ・オペラ」と称してワグナーに挑戦したところ、おかげさまで会場の東京文化会館は満員になりました。日本ワグナー協会からも「これからも続けて欲しい」と賞賛をいただけて、以降2008年までにワグナーの巨大なオペラ7作品を

上演しました。シティ・フィルのメンバーはとても好奇心が強く、集中力とエネルギーをもって演奏してくれました。若い軽い響きから出発し、深い劇的な響きを作り上げるようになりました。

並行して、フランス音楽に造詣の深い指揮者・矢崎彦太郎さんに「フランス音楽の彩と翳」のシリーズをお願いしました。「飯守のドイツ音楽の世界が壊れる」との意見もありましたが、結果はドイツ音楽でもフランス音楽でも本当に表情が多様に、豊かになりましたね。

— 江東区と芸術提携をされているシティ・フィル。江東区はどんな街だと思えますか

「東京シティ・バレエ団」とともに、江東区と芸術提携をして20年が経ちます。シティ・フィルはこのバレエ団ともウマが合うと思いますよ。「オーケストラ・ミッド・バレエ」という企画を定期的に公演していますが、ダンスも踊りやすいと思うくらいではないでしょうか。

シティ・フィルは「下町のオーケストラ」といわれ、あたたかいお客さんが多いと思います。それに今、湾岸エリアがアツいでしょ。若い夫婦や子どもが増えているから、これからたくさん「ティアラこうとう」にも足を運んでくれると思います。音も良いし、雰囲気も良いし、公園も近くにあるホールだから、もつと多くの人にいらしてもらいたいですね。

— ワグナーの音楽とはどういうものですか

とても劇的でスケールが大きく、圧倒的な表現力を持っています。今、目の前で何が起きているのかが見えるような音楽です。例えば今回演奏する「タンホイザー序曲」も、楽器の使い方がとても素晴らしい。音楽の内容も、精神的な愛と官能的な愛との対比など、ワグナー自身の心の葛藤が見事に表現されているところが、時代を超えて私たちの心を動かすのだと思います。やはり音楽の歴史を変えるほどの影響を与えた人だと思えますよ。

— 最後にこの先、どんな展開を考えてらっしゃいますか

来年度はブラームスのツィクルス（特定の作曲家の作品を連続して演奏する演奏会シリーズ）に取り組みます。

江東区のおけとして、古くから親しんでくれている人とともに、新しい聴衆ができていくと、新しい心を感じます。その人たちの心をシティ・フィルと一緒につかみたい。音楽を通して、自然な形で喜びと生きる力を伝えたいですね。シティ・フィルには優秀なコーラスもあるので宗教曲などもいいですね。これからはシティ・フィルが挑戦したいことがあれば私

東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団
第48回ティアラこうとう定期演奏会

飯守泰次郎の十八番

2017年3月4日 14:00開演 (13:15開場)